



《鳩と青年》1954

戦後80年  
香月泰男  
戦争の記憶・  
〈私の〉地球

2025.7.2水-9.28日

開館時間 9:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週火曜日・9月24日(水) ※9月23日(火)は開館

入館料 一般500(400)円／小中高生200(150)円 ※未就学児は無料 ※( )内は20名以上の団体料金

特別協力 山口県立美術館・帰還者たちの記憶ミュージアム(平和祈念展示資料館)

香月泰男美術館 〒759-3802 山口県長門市三隅中226  
TEL 0837 (43) 2500

“平和への願望”

# 私の思考は、いつも結局はシベリヤになってしまう

本展覧会は、画家・香月泰男の従軍・シベリヤ抑留の体験が画業に与えた影響に迫ります。

幼い頃に画家を志し、その夢を実現させた香月泰男（1911-1974）は、新進気鋭の画家としてこれからという時、召集令状が届き従軍することになりました。出征時には絵具箱を携え、“絵筆を握って死ぬつもりだった”香月は、生命の危機が迫る瞬間にすら“絵になるものを発見せずにはいられなかった”と語っています。

敗戦後はシベリヤに抑留されますが、生きて家族のもとに帰るという信念のもと、絵具箱とともに復員したのは1947年のことでした。

戦後、生涯の制作拠点としたふるさと三隅を“〈私の〉地球”として、家族と過ごす平和な時間の中で風景や動植物など、身の回りのささやかなモチーフを描きました。しかし、香月が日常生活で目にするものは、シベリヤの記憶を呼び覚ましていきました。

会場では、戦時下ゆえに思うように描けなかった風景、戦地から家族に宛てた手紙、戦後、シベリヤの記憶につながった風景などを、香月自身のことばとともにご覧ください。

## 従軍

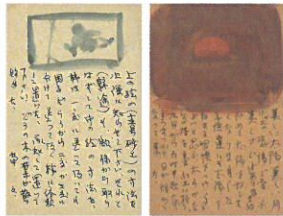
“兵隊にとられ、物理的に絵をほとんど描けなくなった上、日本から離れねばならぬと決ったときのあせりと口惜しさには戦争そのものを本当にうらんだ。”



《石と壺》1940



《砂上》1943



軍事郵便はかき 1943-44\*  
※前・後期で入替 前期(左): 7/2~8/11  
後期(右): 8/13~9/28



絵具箱



《朝陽》1964



《湿地》1959



《業火》1969



《避難民》1969



《避難民》

“外を見ながら、これは絵になるとか、ならないとか、そんなことばかり考えて時間をすごした。”

## シベリヤへ

## 抑留生活

“必死で食べられるものを探した。もし野草を食べなければ、全員が栄養失調になっていたろう。”



《運ぶ人》



《木を切る人》



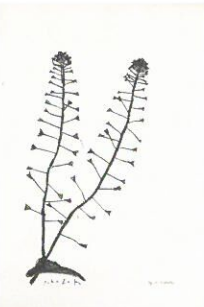
《薔》1955



《百合》1955



《芍薬I》1969



《なずな》1969



《デモ》1972



《デモ》1966



《デモをする人》



《旗を持つ人》



《鳩と青年》1954

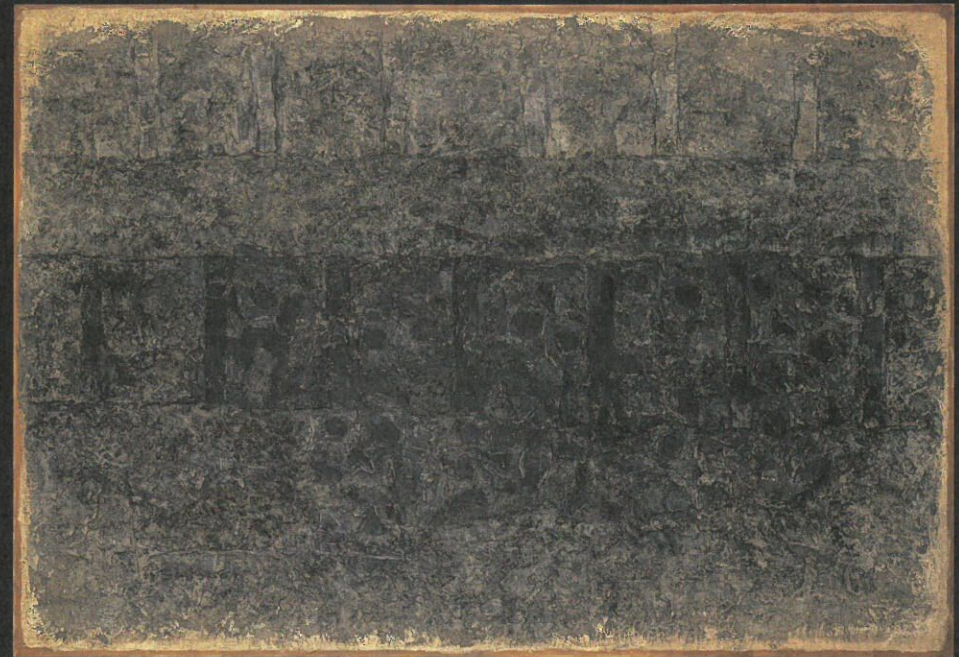
“戦争による膨大な犠牲の代償として日本人に唯一与えられたものは戦争への憎悪による“平和への願望”であったはずです。”

## 復員平和への願い

## 特別展示

## 香月泰男のシベリヤ・シリーズ

特別協力：山口県立美術館



《凍土》1965年 油彩・方解末・木炭、カンヴァス 山口県立美術館 蔵

香月泰男の代表作“シベリヤ・シリーズ”が完成するまでの過程を検証する本企画の第三回は《凍土》を紹介します。

列車は、大地が病んでいるように黒ずんだ湿地帯を過ぎ、ツンドラ地帯へ入った。このあたりは10月中旬だというのに、すでに冬が訪れて、固い凍土が高地进行を覆っていた。そんな中にソ連の戦車が、あざやかなキャタピラの跡を残して走っていくのが見えた。ツンドラに印されたキャタピラの跡は、翌年の春のおとずれまでは決して消えまい。私は軌道に踏み敷かれた骸骨を描くことによって、愚かしくも残酷な、戦争の無意味さを表現してみたいと思った。

自筆解説文 『シベリヤ画集』新潮社1971年

“戦後久しく

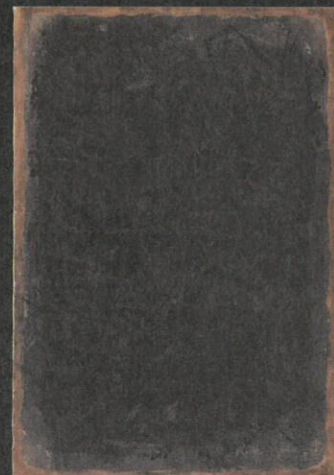
目にすることもなかった

キャタピラを見ているうちに、

私は突然あのツンドラ地帯を

走っていたソ連軍の戦車を

思い出していた。”



《凍地》1959



《凍地》1963